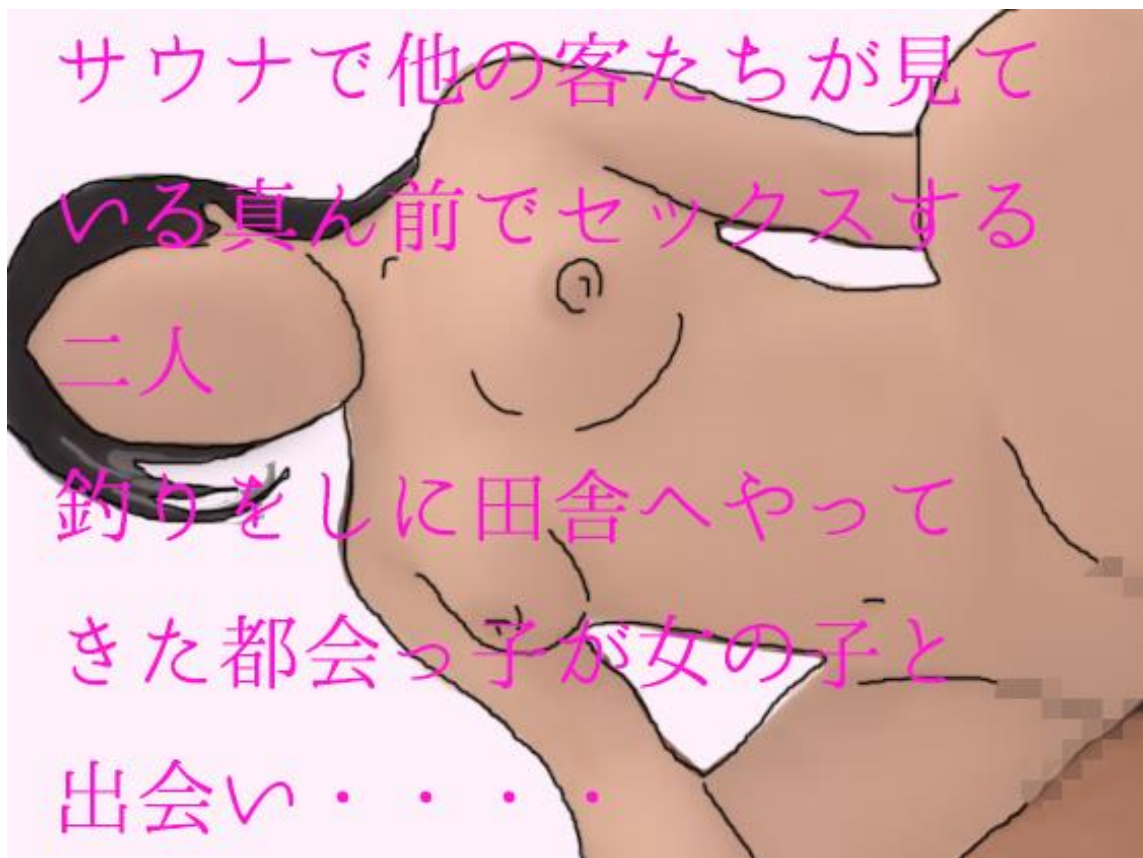


サウナで他の客たちが見ている真ん前でセックスする二人
釣りをしてしに田舎へやってきた都会っ子が女の子と出
会い・・・・・・・・



ガタゴトガタゴトッ！

音を立てて座面と背もたれに揺れを起こすバス。砂利道を走っている。

マサキは都会の人間。趣味の釣りをしに、遠くから田舎へ遠征に来た。

元々、一人での行動が苦にならず一人でどこまででも行ける。学生の時からそうだった。人目を気にしないマイペースな性格。車で近場の海まで朝から釣りに行って夜までしていることもよくある。この日は電車とバスを使って。手持ちの薄い黄色のバッグには折りたたまれた釣りセットが入っている。

バスを降りると、スマホ地図アプリを確認しながら目的地の川へ向かう。

やはり田舎方面の風、空気は心地いい。

落ち葉が茶色くなっている秋のはじめ。マサキは遠くの山々を見渡しながら清々しい心持で歩いた。目的は釣りの楽しみと同時にこの感覚でもあるのだ。

少し歩くと丁度よさそうなスポットを見つける。ほぼ同時に、対岸の奥にポツンと建っている一軒家を見つけた。軒先にブランコ。女の子がその鎖をにぎってポカンと屋根の上空を眺めている。のんびりとした雰囲気。

マサキはまだまだ時間があつたこともあり、釣りをする前に声をかけてみる

ことにした。あまりに暇そうな雰囲気だったので。

「あの・・・・・・・・」

未開の地にやってきた冒険家、田舎へやってきた都会人の価値観の一転・・・
そんな昔の物語にあるようなファンタジーの世界は今の時代の現実にはなかった。少し会話をしたが、会話の内容が擦れきっているのである。おそらく張り巡らされたインターネットによるものだろう。世界を一周でもしたような感覚になるマサキ。

「・・・・・・・・・・へえ、そ、そうなんだ・・・・・・・・」

「そうなんだよ。バイブレーターでオナニーばかりしてるの。パイパンに
してるしさ。エッチいつでもOKだよっ！！」

なんの違いも都会っ子とないことに啞然と。ほぼ、都会で擦れた女の子にナンパしたのと遜色がない。

家の人に見つからないよう、女の子の腕を握って連れ出す。軒先から少し離れる。そして木々がまばらに林立する草が比較的少ない位置へ移動すると、ひざ丈まである女の子の青いスカートをしゃがんでずり下ろした。

「もちろん舐めていいよね？」

マサキは女の子のサヤカと目を合わす。

「……」

コクッとサヤカは頷いた。マサキはパンツ越しにひとまず舐めながら聞く。

「ここでどうやって生活しているの？」

サヤカは両手を胸の位置へ持っていき、指を交差させて軽く握り顔を赤くして答えた。

「今って……この日本でネット出来ないスポットってなくて……ここでもできるから……」

家族ぐるみでブログを書いているのだと言う。主な収益をそこから得ているが、パパはちなみに車で街の会社へも出社しているとのこと。食は自給自足も兼ねているらしい。畑の野菜に米、そして庭にヤギを数頭飼っている。とにかく車が唯一の足で、車にはこだわっている、とサヤカ。

サヤカはパカッと舐めやすいように膝を大股に広げ、パンツをズラしてマサキに割れ目を見せた。

中からはジユクジユクと愛液が透明のまま溢れ出てくる。

マサキはパンツ越しに舐めていたが、我慢できずパンツをずり下ろす。女の子の液とマサキの唾液でパンツはビショビショである。前日の雨で湿ったこげ茶色の葉の数々と遜色がないほど。

————— 体験版は以上になります。 —————